

積極的な参加による図工ワークショップの独自性と見通し

～2008年度と2013年度の紙パックを用いる造形作品の比較を通して～

佐 伯 育 郎*

The Originality and Prospect of Art Workshop by Active Participation:
through comparative consideration between artworks by
using milk cartons in 2008 and in 2013

Ikuo SAEKI*

はじめに

筆者は、児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミの学生とともに図工ワークショップを企画・実施している。地域貢献を主眼とした初等教育学科ソシオ活動の一環である。図工ワークショップは、学内開催（2007年度～2013年度）と学外開催（2011年度・2012年度、広島県立美術館での実施）を併せて9回目を数える。

図工ワークショップを継続してきたことで、ささやかな実績ではあるが確かな手応えを感じている。2013年度は『こんなおうちにすみたいな!』と題して、2013年12月14日（土）に実施した。本稿では、2013年度の実践と2008年度の実践を中心に比較検討することによって、成果・課題を明らかにするとともに、図工ワークショップの独自性と見通しを探っていく。

1. 2008年度との比較検討

(1) 2008年度と2013年度の共通点

2008年度と2013年度の共通点は、①主材料②ねらい1③当日のプログラム④参加者用の資料

⑤ほっとひといきコーナー⑥アトラクションのプログラム⑦事前・当日・事後の「7・1・2」の7点である。

①主材料は紙パックである。事前に案内状で洗済済み紙パックを持参するよう参加者に伝えたことも共通している。紙パックは、良質なバージンパルプから作られている。安全で衛生的であり、遮光性も高い。軽量かつコンパクトであり、運搬・携帯もしやすい。表面はポリエチレンでコーティングされており、耐水性にも優れている。カッターナイフやデザインナイフでの切れ味もよく、造形材料としても適している。補助的な材料として、ダンボール、色画用紙等を用意したことも共通している。

②ねらい1も共通している。ねらい1とは、紙パックやダンボールを再利用した作品づくりを通して、造形材料を見つめ直すことである。身近な物を見つめ直し、大切に作るきっかけをつくること、造形活動とエコとの関係に興味・関心を持って頂くことである。身近材を用いた造形活動とエコとを結びつけた実践、美術教育における環境教育の視点を含んだ取り組みということも共通している。

③当日のプログラムも、ほぼ共通している。

1. 開会宣言

* 本学准教授

2. スタッフ紹介・挨拶
3. 参考作品紹介・コーナー紹介
4. 作品づくり
5. アトラクション

6. 閉会宣言・記念撮影・アンケート記入

異なる点は、2008年度では学科長の挨拶があったこと、2013年度では作品づくりの途中で10分間の休憩を設けていることである。10分間休憩は、2009年度から設けている。2013年度では、開始前の受付時に「ジブンシン」作成のために美術棟1階ギャラリーで参加者の写真撮影を行った。

④参加者用の資料も共通である。作品の作り方を示したプリント、歌詞カード、事後アンケートの3種である（内容は異なる）。

⑤飲み物を置いた休憩用の「ほっとひといきコーナー」も共通している。2013年度では会場の混雑を防ぐため、コーナーを1つ増設した。

⑥ワークショップ後半に行うアトラクションのプログラムも共通している。最初に全員で「あわてんぼうのサンタクロース」を歌唱すること、後半特別ゲストが登場し、LED ライトをプレゼントし、作品に内蔵させてライトアップするという流れは共通している。

⑦事前・当日・事後の「7・1・2」という点も共通している。

「7・1・2」とは「授業の黄金率（比）」というものであり、筆者が担当している初等教育学科2年次の「図画工作科教育法」のキーワードの1つである。教師が授業を組み立てる際の、理想的な力の入れ方である。授業前7割・授業中1割・授業後2割という意味である。「7・1・2」とは、「人事を尽くして天命を待つ（＝人間の力としてできるだけ努力をし、その結果は運命に任せる）」と換言できる。

筆者のゼミでは、図工ワークショップに向け

て後期開始時から事前準備を進めている。「教科教育学演習Ⅱ・Ⅳ」「幼児教育学演習Ⅳ」等で教材研究・題材開発を行う。筆者・ゼミ生ともに、参考作品を毎年作成している（写真1～4）。児童教育コース図画工作専修のゼミ活動では平面表現による作品制作が主となるため、ワークショップでは立体・工作の作品を取り上げることが多い。ワークショップ直前になると、教材・教具の準備、会場設営等も協力して行う。事後は礼状の作成・送付だけでなく、自己評価シートの記述等を通して振り返りを行う。ゼミ生は、この取り組みを通して「7・1・2」を体感し、その大切さを実感することができる。本学のソシオ活動は、「大学が行っている教育活動がそのまま地域貢献になる」ことがコンセプトであり、図工ワークショップはそのことを体現している。

(2) 2008年度と2013年度の相違点

2008年度と2013年度の相違点は、①題材②作品の作り方③ねらい④環境設定⑤時間設定⑥開始前の活動⑦作り方の説明⑧登場ゲスト⑨参加者へのプレゼント⑩アトラクションの手法⑪事前の広報活動⑫事後の活動、の12点である。

①主材料は同じであるが、題材は異なる。2008年度の題材は、ランプシェードとトナカイであり、どちらかを選択して参加者に作って頂いた（写真5）¹⁾。トナカイはハサミだけでも作れるが、ランプシェードはカッターナイフ・デザインナイフを使わなければならないため、子どもにはトナカイ、大人にはランプシェードを作って頂く予定であった。統一することも考えたが、子どもたちの発達段階、抵抗感の軽減や事故防止を考慮した結果、このように設定した。当日は、逆の場合や両方作る参加者も見られた。1回のワークショップに題材が2つあるため、

複雑さが反省点となった。

2013年度は、題材を「住んでみたいと思う家」に統一した。2008年度の反省を踏まえ、2009年度からは題材を1つに絞っている。家を作ることは、学生の発案である。2012年10月26日の「教科教育学演習Ⅱ」において児童教育コース図画工作専修2年生（現3年生・31期生）が「こんなおうちにすみたいな！」という題材名を思い付いたことが契機となった。

2008年度のランプシェードと2013年度の家は、ダンボールのベース上に紙パックを乗せて作る場所は似ているが、根本的に性質が異なる。ランプシェードは小学校学習指導要領・図画工作科「A表現」の「(2) 工作に表す」内容である。家は「A表現」の「(2) 立体に表す」内容である。工作は適応表現と呼ばれ、完成作品は機能的であり、デザインに分類される。立体は心象表現と呼ばれ、完成作品は非機能的なものであり、アートに分類される。

2013年度の家は、機能性よりも心象性を強調した立体の題材である。家を展示する舞台「イルミナタウン（ILLUMINATION TOWN、居皆町＝皆が居る町・皆が要る町）」（写真6）と、自分が作った家に入り込むため、町に住むための「ジブンシン（自分+分身+写真）」（写真7）というガジェットを設定した。「イルミナタウン」には、学生・筆者の作品を並べた「ILLUMINATION TOWN、(旧)居皆町」（写真8）と、参加者に作品を並べて頂くため工事中的「ILLUMINATION NEW TOWN、居皆新町」（写真9）の2つを用意した。「ジブンシン」には、心象性を高めることを意図した人物を撮影したタイプ、町のリアリティを高めることを意図した自動販売機等の町中にある物品を撮影したタイプがある。人物タイプの「ジブンシン」は、2013年度の文教祭で展示した幼児教育コース図画工作ゼ

ミ4年生による共同制作で写真を使用したアイディアが基になっている。物品タイプの「ジブンシン」は、2012年に筆者が鑑賞した展覧会での学びを生かしたものである²⁾。「イルミナタウン」には、特撮のセットやジオラマのような臨場感と楽しさがある。以上のように、同じ紙パックを主材料として用いても、全く異なる題材として展開できるのである。

②作品の作り方も異なる。2008年度では、紙パックを立体（箱）のままデザインナイフで穴を開けた。2013年度では、紙パックをハサミで切り開いて平面にして、表側（印刷面）から窓や扉をカッターナイフ・デザインナイフで切り開いた。立体のまま穴を開けるよりも、一旦平面にしてからのほうが加工しやすかった。

2008年度では、筆むらもなく、仕上がりが綺麗であることから、紙パックの塗装にラッカースプレーを用いた。ダンボールを活用したスプレーボックスを8号館（BECC）への渡り廊下に置き、塗装した。12月初旬であり、気温が低く、乾くまでに時間がかかった。ドライヤーを使って学生が臨機応変に対応したが、子どもたちにとってもスプレーは扱いにくいようであった。2013年度では、紙パックを切り開き、穴をあけた後、内側の面を表側になるよう裏返して組み立てた。反転して組み立てるため、この手法を「リバーシビルド（reversible+build）」と名付けた。紙パック内側の白い面が表になるため、塗装する必要がなかった。装飾したい場合は、マスキングテープ等を使用した。

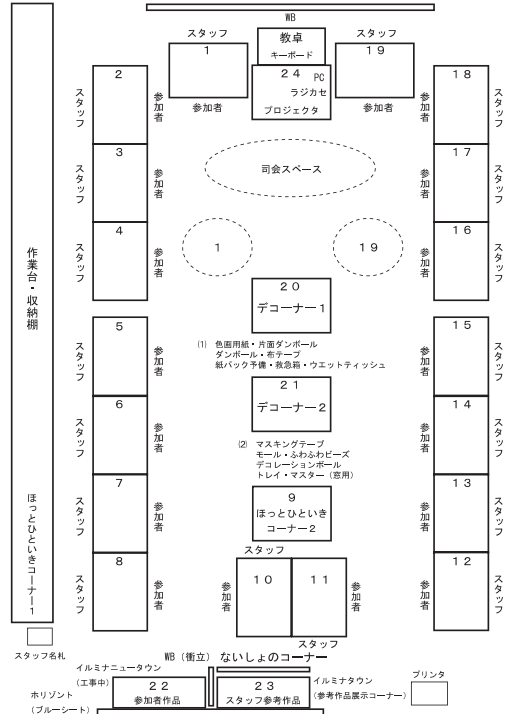
③ねらい2も異なる。2008年度のねらい2は、クリスマスというイベントの楽しい雰囲気とともに、身近材を用いた手作りの作品で、造形活動の面白さを参加者に味わって頂くことである。作品づくりやアトラクション等を通して、手作り感のあるクリスマス、通常とは一味違うクリ

スマスを味わって頂きたいというものである。しかし、このねらいは2013年度にも通底している。

2013年度のねらい2は、紙バックの家作りを通して、すまいの大切さを見つめ直すというものである。このねらい2は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響がある。1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災を体験したアーティストと、その作品の影響でもある³⁾。このねらい2は筆者独自のテーマであり、ワークショップでは前面に出すことはなかった。完成している「ILLUMINATION TOWN、(旧)居皆町」と工事中の「ILLUMINATION NEW-TOWN、居皆新町」が完成した時点で、両者の間に橋を架けることにした。筆者・学生スタッフと参加者の間に橋を架けるという意味であったが、筆者の中では被災地復興のイメージも重ねていた。

④環境設定も異なる。会場が絵画室 A (135教室) であることは共通であるが、2013年度では座席やコーナー等の環境設定を変えた。2012年度の図工ワークショップ終了後、幼児教育コース図画工作ゼミの3年生(現4年生・30期生)が提案した環境設定を基にした。2012年度までは、講義等の通常授業で使用する座席のままになっていたが、コーナー使用時に混雑する等の問題点があった。参加者数が増加したことに伴って生じた問題である。

2013年度は、参加者の座席を図1のように変更した。参加者と学生スタッフを対面させることで、コミュニケーションをとりやすくした。作品を装飾する材料・用具を置いた「デコナー(デコレーション・コーナー)」、飲み物を置いた休憩用の「ほっとひといきコーナー」を会場の中央に配置し、参加者が移動しやすいうように配慮した。



【図1：2013年度・図工ワークショップの環境設定】

⑤時間設定も異なる。2008年度は午前開催(9:30~12:00)であったが、2013年度は午後開催(13:30~16:00)であった。2007年度、2009年度から2013年度まで午後開催としている。当日の午前中にも、リハーサルや最終チェック等ができるからである。

⑥開始前の活動も異なる。2008年度では、会場に「折り紙コーナー」を準備していたため、開始まで作る合間に遊んでもらうことができた。「折り紙コーナー」は好評であり、利用度が高かったが、コーナーのスペースが狭く、折り紙の色数も少なかった。特定のスタッフもつけるべきであった。

2013年度では、参加者の各テーブル上に「やってみよう!アーティのぬりえ」というA4サイズの塗り絵を用意した。開始前の時間を使って子どもたちは塗り絵に取り組んでいた。あまり興味を示さない男児も認められたが、女

児は熱心に取り組んでいた。

⑦作り方の説明も異なる。2008年度では、消灯して OHC（実物投影機）とプロジェクタを使って学生の示範を拡大投影した。ステップ 1～4 の行程に分けて説明を行ったが、活動が中断されてしまい、かえって混乱を生じた。次のステップへと進んでいる参加者も見られた。ランプシェードとトナカイの作り方を交互に示範したが、理解しにくかった参加者もいただろう。学生が説明する時、ランプシェードの場合はサンタの帽子を被り、トナカイの場合はトナカイの角のあるカチューシャを付けて示した。しかし、煩雑な説明になった。

2013年度では、プロジェクタを使用して作り方を説明した動画を見て頂いた。「教科教育学演習Ⅱ・Ⅳ」において児童教育コース図画工作専修 2・3 年生（32・31期生）が作成したものである。3 年生の 1 人が動画編集ソフト「Windows ムービーメーカー」で編集を行ったものを上映した。学生が作品を作る様子、完成までの過程を映像で示した。

⑧登場ゲストも異なる。2008年度では、「あわてんぼうのサンタクロース」の合唱に合わせて前学科長扮するサンタクロースが歩いて登場し、参加者にプレゼントを手渡した。2010年度から2012年度まで、学生扮するサンタクロースとトナカイが登場した。

2013年度は、合唱後トナカイが押すソリに乗ってサンタクロースが登場した。サンタの服を脱ぎ捨てると、その正体は図工アイドル「アーティ」であった。図工アイドル「アーティ」とは、図画工作専修 4 年生（30期生）が考案したゼミのマスコットキャラクターである（写真10）。そのデザインを基に、別の 4 年生（30期生）が卒業制作の一環として作成し、自ら扮して登場した（写真11～13）。ソリ「アートナカ

イ号」（写真14）は、3 年生が台車を改造して作成したものであった。

⑨参加者へのプレゼントも異なる。2008年度のプレゼントは、完成したランプシェードに内蔵するための LED 光源 2 種、光が蠟燭のように揺らぐ「LED キャンドル」と、色が 7 色に変化する「ピコライト」であった（株式会社パジコ）。学科長扮したサンタクロースから参加者へプレゼントした。

2013年度は、LED 光源 1 種を「アーティ」の手からプレゼントした。今回の「LED 変色ライト球」は、2008年度よりも安価であり、サイズ・光量ともに大きい（丸七株式会社）。開始前の受付時には、「アーティ」のポストカードを参加者にプレゼントした。会場にもアルミフレームに入れた「アーティ」の画像を 2 箇所展示し、実物登場の布石とした。

⑩アトラクションの手法も異なっている。消灯して、イルミネーションを楽しんだことは共通しているが、鑑賞の仕方を変更した。

2008年度では、「プチ・キャンドル・サービス」を行った。会場のブラインドを下げて消灯し、全員で輪になってランプシェードを点灯した。「ハッピー・ハッピー・リサイクル！！」のかけ声とともに、学生があるアーティスト⁴⁾の言葉を音読した。

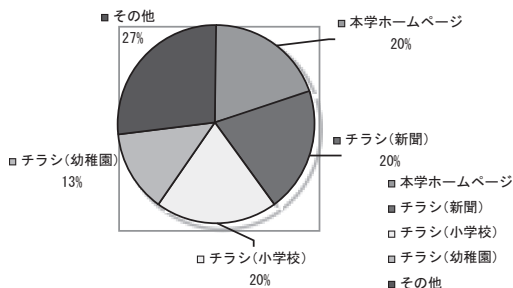
2013年度では、学生スタッフと参加者が点灯した LED ライトを家の中に入れた。「アーティ」が参加者に目を瞑るよう促し、消灯した。「ライトアップ・ザ・イルミナタウン！」のかけ声とともに目を開けると、光り輝く「イルミナタウン」が眼前に現れた。

2008年度は全員で輪になった結果、お互いの作品が離れてしまい、相互鑑賞することが難しくなった。2013年度では、「イルミナタウン」に全員の作品を並べて、町作りをした。1 点に

集中してイルミネーションを鑑賞することができた。光量だけでなく、感動も増した。目を開けた途端、子どもたちが自然と「イルミナタウン」に走って集まり、間近で鑑賞していた。生き生きとした瞳が、筆者の印象に強く残っている。これまで時間の関係でできなかった相互鑑賞する機会を、自然な形で得ることができた(写真15)。

⑪事前の広報活動の変化に伴い、参加者数も異なった。2008年度は、ワークショップの開催案内をホームページに掲載するとともに、本学公開講座のちらしにも掲載して頂いた。折り込み広告として入れて頂く新聞が2社に増え、図工ワークショップ初年度の2007年度よりも参加者数は増加した。

2013年度は、ホームページ、折り込み広告の他、広島文教女子大学附属幼稚園や近隣の小学校などでチラシを配付した。参加のきっかけは、グラフ1の通りである。2008年度は39人(子ども22人、大人17人)、2013年度は42人(子ども27人、大人15人)であった(写真16)。微増ではあるが、効果はあったといえる。これまでの実践の積み重ねがあるため、リピーターも多かった。参加者13組中7組(申込15組中9組)は、これまでの図工ワークショップに参加したリピーターであった。昨年度実現できなかった折り込み広告への掲載については、エクステンションセンターの配慮で実現できた。しかし、



グラフ1 【ワークショップ参加のきっかけ】

「来年も来たいので、よろしくお願いします。チラシの分かりやすいところに書いてあると嬉しいです。去年は見落としてしまいました。(参加者・母親)」という参加者の意見があった。昨年度は諸事情で掲載できなかったが、チラシに掲載する年、掲載しない年があると、参加者に対して不親切であることが理解できた。

⑫事後の活動も変更した。礼状・当日の写真を送付したことは共通しているが、2013年度では「アーティ」による御礼の手紙も同封した。

2013年度では、当日の様子をまとめ、本学ホームページにある初教の「今日の出来事」に掲載して頂いた。

2. 2012年度との比較検討

(1) 2012年度の課題

図工ワークショップの成果と課題を明らかにするため、2012年度の実践とも比較検討する。2012年度の反省を踏まえた課題は、①1題材1アトラクションにして焦点化する②作品のパーツ・サイズなどを検討して、子どもにも取り組みやすくする③時間配分を検討して、作品を作る時間をできるだけ長く設定する④作品づくりの動機付けを高める工夫をする⑤開始前の時間に工夫をする⑥相互鑑賞を行う場面を取り入れる⑦筆者のゼミである児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミでの学生間のコミュニケーションを向上させる必要がある⑧会場の環境設定を再検討する、が挙げられた⁵⁾。

(2) 2013年度の改善点

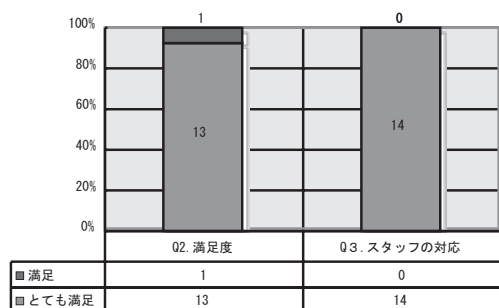
2013年度は、上記2.(1)の課題①②④⑤⑥⑧を改善することができた。①⑥については、先述の通り改善できた。②については、昨年のサンタクロースよりもパーツ数を減らし、作り

やすくすることができた。③は実行することができたが、十分とは言えなかった。2012年度の作品を作る時間は、計画では65分、実際は約90分であった。2013年度は、計画では100分、実際は約120分であった。昨年同様、終了時刻を延長することになった。④は、口頭による説明ではなく動画を用いることで、説明の量と時間を短縮することができた。しかし、「こんなおうちをつくりたい！」という動機付けを高めることができたかどうかまではわからなかった。⑤は各テーブルで取り組むことができる塗り絵を導入し、開始前の手持ち無沙汰を解消することができた。⑦については改善できず、今後に持ち越しとなった。

3. 図工ワークショップの成果・課題

参加者・学生スタッフ対象のアンケート結果を根拠にして、図工ワークショップの成果と課題について考察する。

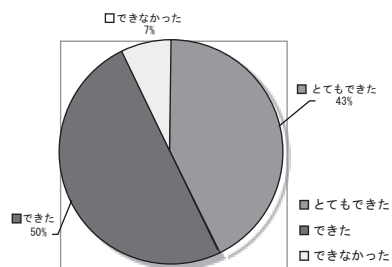
参加者対象アンケートの「Q2. 図工のワークショップの満足度はいかがでしたか?」「Q3. 学生・教員など、スタッフの対応はいかがでしたか?」という設問に対して、「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。グラフ化した結果、「とても満足 満足」のみの回答であり、昨年度よりも満足度は高かった(グラフ2)。



グラフ2 【ワークショップの満足度】

「紙パックのおうち作りを通して、すまいの大切さ・身近な造形材料を見つめ直す」というねらいの達成度について質問した。「Q4. 今日の図工ワークショップのねらいはいかがでしたか?」という設問に対して、「とてもできた できた できなかった 全くできなかった」の4段階で回答して頂いた(グラフ3)。ねらいの達成度は、昨年度よりも低かった。

とてもできた理由としては「最後に居皆町に飾ってみて、街づくりの中の家づくりの大切さが理解できた。(参加者・父親)」「紙パックの工作はいろいろとしてきましたが、今回のような立体の工作は初めてです。小3の娘は、殆ど自分でできて大満足でした。(参加者・母親)」という回答があった。できた理由としては「自分(子ども)の手で家を作り、家族の大切さ、みんなで仲よく暮らしていけることを子どもに考えることを与えて頂けたように思う。(参加者・母親)」できなかった理由は「テーマを考えず、ただ工作を楽しんで作業してしまった。(参加者・母親)」というものであった。学生スタッフも「幼いため、“すまいの大切さ”までは微妙でしたが、身近な造形材料という点では達成できていると思った。(図工ゼミ3年)」「“すまいの大切さ”は分かりませんが、身近なもので作品が作れるのだということは感じてもらうことができたのではないかと思います。色々な飾り付けも楽しむことができたと思うので、作品を作るこ



グラフ3 【ワークショップのねらいの達成度】

と、図工が楽しいということを改めて感じる事ができたのではないかと思います。(図工ゼミ3年)」「『家でも続きを作る!』と多くの子が言ってくれた。紙パック・ダンボールという身近な材を使ったため、大きさの違う紙パックで作ったり、飾り付けに家にあるものを使ったり、工夫のしがいがある。“すまいの大切さ”については触れることができなかつたかもしれない。(図工専修3年)」と述べていた。筆者のねらいの設定に問題があった結果であろう。「すまいの大切さ」というねらい2は、学生スタッフ・参加者には伝わりにくかつた。

「Q6. ご意見・ご感想・改善点などをお書きください。参考にいたします。」という設問に対しては、次の回答を得た。「テーブルの配置等、材料を取りに行きやすく、作業もしやすかつたです。アーティちゃんの登場にびっくりでした。衣装もソリも手作りで素敵でしたよ。学生のお姉ちゃん先生も優しく、丁寧に教えて下さって、希望のお家が作れたようです。イルミナタウンのイルミネーションライトアップは、子どもたちの目も輝いていました。他の方の作品を見ることで、また新たな発想ができるようになるでしょう。ありがとうございました。(参加者・母親)」「おうちという題材は身近で、シンプルな形なので工夫しやすく、楽しかつた様子です。教室も上手に仕切られており、危なくなく行うことができました。ありがとうございました。(参加者・母親)」「去年も参加させて頂いて、とても楽しかつたです。来年も楽しみにしています。(参加者・母親)」という回答があり、好評であつた。環境設定を変更した事で、会場の混雑を解消することができたことも述べられていた。リピーター特有の貴重な回答であつた。

学生スタッフは「身近な物を使って作品ができると、驚きとともに創造力が湧いてくると

思つた。LED ライトは成功だつたと思つた。自分が作つたお家がいろんな色に光っている!というのは、うれしそつだつた。(図工ゼミ3年)」「身近なものでの作品だつたので、子どもたちにとって“こんなことができるんだ”という発見があつたと思ひます。完成してからは、ライトアップという“完成した”という気持ちにしっかりとるような演出だつたと思ひるので、達成感を十分に感じる事ができたのではないかと思ひました。(図工ゼミ3年)」「少々シンプル過ぎると思ひましたが、去年のダンドールは時間が足りなさ過ぎたため、今回くらいのシンプルさがよかつたと思ひました。形を完成させるまでで精一杯だつた昨年と比べ、工夫して自分のアイデアを具現化している子が多かつた。皆のお家が1つの町を作っているという感じが、ライトをつけた瞬間に分かつたのがとても伝わつてきて、嬉しくなつた。(図工専修3年)」「紙パックを平面にすることで、加工しやすかつた。立体から平面、平面から立体という流れによってイメージがつかみやすかつたと思ひます。LED によるライトアップは幻想的で、子どもたちの感動を導いたと考える。(図工専修3年)」と述べていた。題材やアトラクションについての評価は高かつた。

課題としては、作り方の説明、安全対策・怪我防止、時間設定が挙げられる。

作り方の説明では、動画を用いた。学生スタッフは「動画の説明は映像を実際に見ることができて分かりやすかつたのですが、キャプションだけでなく、司会が説明するともっとよいと思ひました。(図工専修3年)」「ムービーを見ながら誰かが説明したり、言葉かけをしたりすることが必要だと思ひました。ただ単に映像を見せられると、保護者も子どもも分からないと思ひます。(図工ゼミ4年)」「説明をビデオにしたのはよかつたが、文字が読めない子どももいると思

うし、ざっくりした説明だったので、保護者もあまりわかっていないようでした。ビデオプラス、実際に見せた方がいいと思いました。(図工ゼミ4年)」と述べていた。意欲的な工夫だったと筆者は考えているが、次年度は Microsoft の PowerPoint を使用して説明することも考えたい。

2013年度では、デザインナイフ使用中に指を切ってしまった女兒がいた。保健室から借りた救急箱で手当をすることができた。「6歳の娘がカッターを初めて使い、怪我をしまいました。カッターが危ないとよくわかったと言っています。先生方にはご心配をおかけして申し訳ありませんでした。ありがとうございます。(参加者・母親)」と述べて下さり、かえって恐縮した。担当学生が、粘り強く支援にあたっていたので大事には至らなかったが、これまで以上に安全対策・怪我防止には気を配りたい。

時間設定は、例年13:30から16:00の2時間30分であった。内容を削除することは避けたいので、次年度からは、あらかじめ13:30から16:30の3時間設定に変更することで改善したい。

4. 図工ワークショップの独自性と見通し

これまでの考察を踏まえ、図工ワークショップの独自性をまとめると次の5点になる。

- ① 教員、児童教育コース・図画工作専修、幼児教育コース・図画工作ゼミの学生が参加し、共同で教材研究・題材開発を行い、ともにスタッフとしてワークショップを企画・実施する。
- ② 普段のゼミ活動(作品制作)では平面表現が主となるため、ワークショップでは立体・工作の作品を中心に取り上げる。
- ③ 美術教育における環境教育の視点を意識して、身辺材(廃材)を主材料とした題材にす

る。

- ④ 何かをヒントにしながらも、独自の視点を加え、何らかのオリジナリティを含む題材を生み出す。

- ⑤ たとえ同じ主材料であっても、題材やアトラクションなどに、毎回何か新しいアイデアを取り入れる。

以上5点の独自性を持つ図工ワークショップに対して、筆者は次の5点の見通しを持っている。

- ① 参加者・学生スタッフともに好評であり、これまでの図工ワークショップの取り組みには一定の成果があった。
- ② 普段のゼミ活動・授業とは違う学びであり、教育・保育実習と教育・保育の現場とをつなぐ実践の場になるため、学生の成長が期待できる。
- ③ 美術教育における環境教育の視点を意識して、身辺材(廃材)を主材料とした題材を今後も開発していきたい。
- ④ 何かをヒントにしながらも、独自の視点を加え、オリジナル題材を生み出していきたい。
- ⑤ 熱心な参加によって支えられており、地域貢献になるだけでなく、本学のアピールにもつながるので、今後も継続・実施していきたい。

謝辞

図工ワークショップにご参加の皆様、ご協力くださいました学園統括部、エクステンションセンター、初等教育学科、関係者各位に心より感謝いたします。公開講座の折り込み広告に、図工ワークショップの案内を掲載して頂きましたエクステンションセンター長・岡馬重充教授に感謝いたします。本当にありがとうございました。

参考文献

- ・若元澄男編集『図画工作・美術科300の基礎知識』明治図書 2000年

- ・福井凱将・小平征男・佐々木幸編集『小学校図画工作科教育の基礎 図工指導のエッセンス』三晃書房 1997年
- ・庵野秀明『「特撮博物館」展示図録+別冊「巨神兵東京に現わる」パンフレット』スタジオジブリ・日本テレビ放送網株式会社 2012年

註

- 1) 詳細は、佐伯育郎「初等教育学科ソシオ活動2008の実践～図画工作での取り組み～」(『広島文教教育 第23巻』広島文教教育学会、2009年) 所収参照のこと。
- 2) この展覧会とは、東京都現代美術館において2012年7月10日から10月8日まで開催された「館長 庵野秀明 特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和の技」のことである。会場では、特撮の映画・TVで活躍したミニチュアや小道具(プロップ)、デザイン画等の貴重な資料が約500点展示されていた。筆者は3回鑑賞した。この展覧会では、「ジブンシン」と同様のものを「切り出しエキストラ」と呼称していた。
- 3) このアーティストとは、神戸市出身の杉山知子(1958～)である。1997年の阪神・淡路大震災で被災した直後、「1000軒の家」という絵画作品のシリーズ

を展開していた。現在は、神戸を拠点に活動するアーティストグループであるNPO法人C.A.P(芸術と計画会議)の代表をしている。

- 4) このアーティストとは、高橋はゆみ(1969～1997)である。高橋は、豊かな発想と感性を活かして、美術・文芸・音楽などに渡って多彩な活動をしていたが、不慮の事故により28歳で急逝した。高橋が残した文章『ハッピー・ハッピー・リサイクル～「リサイクル・アート」に取り組むようになったきっかけは……?～」から一部抜粋・再構成した言葉を、学生が発表・紹介した。高橋の作品を鑑賞したことが、紙パックのランプシェードなどをはじめとする身辺材を用いて生み出す造形作品の制作につながった。高橋が作詞・作曲した『ね』という代表曲はCD化されている(日本コロムビア『かぞくみんなのファミリーソング ふぁみ・そん』)。ご遺族が監修した絵楽譜も出版されている(高橋はゆみ『天使のこもりうた』株式会社文芸社ビジュアルアート 2009年)。
- 5) 詳細は、佐伯育郎「身辺材を用いて生み出す造形作品の可能性～図工の教室『いたらいいな!あんなサンタこんなサンタ』に関する考察～」(『広島文教教育 第27巻』広島文教教育学会、2013年) 所収参照のこと。



【写真1：筆者の参考作品】



【写真2：学生の参考作品①（スタンダード・タイプ）】



【写真3：学生の参考作品②（デコラティブ・タイプ）】



【写真4：学生の参考作品③（アグレッシブ・タイプ）】



【写真5：2008年度の題材 ランプシェードとトナカイ】



【写真6：イルミナタウン（完成形）】



【写真7：ジブンシン（人物タイプと物品タイプ）】



【写真8：ILLUMINATION TOWN、(旧) 居皆町】



【写真9：ILLUMINATION NEW TOWN、居皆新町（工事中）】



【写真10：図エアイドル「アーティ」】



【写真11：学生が扮した「アーティ」】



【写真12：「アーティ」と家族毎の記念写真①】



【写真13：「アーティ」と家族毎の記念写真②】



【写真14：ソリ「アートナカイ号」】



【写真15：ライトアップ・ザ・イルミナタウン！】



【写真16：全体記念写真】